

大学生におけるひきこもりのしろうと理論

勝又陽太郎^{1*}、高橋夕佳梨²

本研究では、わが国で重大な社会問題となっている「ひきこもり」のしろうと理論の構造を明らかにすることを目的として、大学生46名を対象に文章完成法を用いて自由記述データを収集し、KJ法およびテキストマイニングの手法を用いて内容の分析を行った。分析の結果、ひきこもりの「原因」や「状態」に関する記述の出現頻度が相対的に高く、いずれもひきこもりに関するしろうと理論の重要な構成要素であると考えられた。また、これと同時に、ひきこもりに対する「支援の必要性」や「ポジティブな意味づけ」、あるいはひきこもりを「誰にでも起こりうる身近な問題」としてとらえるといった記述が多くみられるなど、ひきこもりに対する共感的・肯定的なイメージも認められた。さらに、本研究においては、ひきこもりという単語から家族や非現実的世界（インターネットやゲーム）に関連するイメージが想起されやすいことも示唆された。本研究の結果は、ひきこもり支援に関連した一般地域住民への普及啓発のあり方について、重要な示唆を提供し得るものであると考えられた。

キーワード： ひきこもり、しろうと理論、KJ法、テキストマイニング

はじめに

ひきこもりは子どもから成人まで幅広い年齢層に生じる社会現象の一つであり、「様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」を指す現象概念である¹⁾。ひきこもりはわが国における重要な社会問題の一つとされ、国内の一般地域住民を対象とした疫学調査によれば、生涯に一度でもひきこもりを経験したことがある人は一般人口の約1.2%で、調査時点でひきこもり状態にある子どもを持つ世帯も約0.5%に上る²⁾。また、ひきこもりの経験は20歳代が30～40歳代よりも多く、男性に多いことが明らかにされている³⁾。さらに、同調査ではひきこもりの平均開始年齢が22.3歳であることが明らかにされているが²⁾、他の調査では多くの者が10代のうちにひきこもりの状態になっている一方で、30代以降にひきこもりを始めた者もいることが明らかになっている³⁾。なお、ひきこもりは原則として統合失

調症の症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象であるとされているが¹⁾、実際には確定診断がなされる前の統合失調症やその他の精神疾患を抱えている可能性があることも報告されており⁴⁾、精神保健的な支援が必要となる事例も数多く存在する。

こうした状況を踏まえ、厚生労働省は2009年度からひきこもり対策を事業化し、各都道府県・政令指定都市における「ひきこもり地域支援センター」等を中心とした相談・支援体制を構築してきた。しかし、これまでのところ、ひきこもりの長期化・高齢化や、それに伴う相談の多様化に対してきめ細かな対応が十分になされているとは言い難い⁵⁾。また、ひきこもりの当事者およびその家族は社会的に孤立し、情報が届きにくくなっている場合が少なくないため、支援に関する質の高い情報が早くから当事者や家族に届くよう、ひきこもり支援にあたる地域の専門機関の啓発活動をより一層充実させることの重要性も指摘されている¹⁾。

もっとも、たとえ当事者が支援に関する情報

¹ 新潟県立大学人間生活学部子ども学科 ² 新潟県立大学人間生活学部子ども学科2期生

* 責任著者 連絡先: yotaro-k@unii.ac.jp

利益相反: なし

を受け取ったとしても、周囲からの偏見に晒されることに不安を抱き、援助要請行動を生起させない可能性も十分考えられる。事実、ひきこもり当事者と家族を対象とした調査では、相談への躊躇や周囲からの偏見に対する不安感だけでなく、地域住民の理解促進を目的とした啓発活動の要求なども繰り返し報告されている⁶⁾⁷⁾。その意味では、当事者やその家族もさることながら、支援者や地域住民全体への普及啓発を充実させていくことも、今後のひきこもり支援を充実させていくために重要な検討事項と言えるだろう。

当事者や専門家以外の一般の人に対する具体的な普及啓発の方法を考える上では、ひきこもりという現象が一般的にどのように理解されているのかを明らかにすることが役立つと思われる。というのも、一般の人が持っている科学的知見に基づかない素朴な信念や考え、知識は「しろうと理論 (lay theory)」と呼ばれ⁸⁾、当該対象に対するステレオタイプ・偏見を反映している可能性があるからである⁹⁾。これまでも様々な対象についてこうした素朴な概念があることが報告されており、たとえば精神保健に関連する領域では、うつ (depression) のしろうと理論の構造が先行研究において検討されている⁹⁾。しかしながら、筆者の知る限り、一般の人が持つひきこもりの知識やイメージ等を調査した研究はこれまでのところほとんど存在しない。

そこで本研究では、ひきこもりについてのしろうと理論の構造を明らかにすることによって、ひきこもりを取り巻く周囲の人に対する効果的な普及啓発のあり方について考察を行う。

方法

調査協力者

心理的支援に関連した筆頭著者の講義を受講している地方公立大学に在籍する大学生 80 名に調査協力依頼を行い、46 名 (女性 41 名、男性 5 名) から回答を得た (回収率 57.5%)。本研究では調査協力の得られた 46 名全員の結果を分析対象とした。

調査手続きと倫理的配慮

調査は 2013 年 12 月に無記名の自記式質問紙を用いて実施された。協力者に対しては筆頭著者の講義終了後に第二著者より口頭および書面で調査の目的、方法、重要性、結果の公表方法に関する説明を行った上で、調査協力の任意性を伝え、個人が特定される情報は収集しないこと、協力を拒否しても個人への不利益が生じないこと、およびプライバシーの保護について説明を行った。また、調査質問項目に「ひきこもり」に関する内容が含まれることを事前に伝え、調査中にその言葉を見ることによって精神的に不安定になる可能性のある者は、事前に調査を辞退してもらったり、答えたくない質問に対しては回答しなくてもよいことを説明した。さらに、調査実施後に精神的に不安定になった場合には、筆頭著者に相談してもらうよう事前に伝えるとともに、筆者のメールアドレスを公開し、調査後の相談体制を確保した。記入済み質問紙は各自個別に封筒に入れて封をした上で、翌週の講義終了時に回収された。

調査項目および分析方法

本調査では、文章完成法を用いて、「ひきこもりは」という書きかけの文章の後に回答者の頭に浮かんだことを自由に記述してもらった。質問紙には回答欄を 10 個設け、できるだけ多くの文章を完成させるように教示を行った。

文章完成法の回答結果については、KJ 法¹⁰⁾に準拠する形でカテゴリの整理を行うとともに、テキストマイニングの手法を用いて、ひきこもりのしろうと理論の構造を多角的に検討した。テキストマイニングは、自由記述などの大量のテキストデータに潜在する構造や規則性を統計的に探索することのできる分析手法であるが¹¹⁾、自由記述の分析において KJ 法と組み合わせることによって、文脈を考慮に入れつつ、分析結果の客観性を担保する手法として先行研究でも導入されていることから⁹⁾、本研究においても分析手法として採用することとした。

KJ 法の分類作業は、心理学を専門とする教員 1 名と大学生の計 2 名が共同で行った。複数の意味合いがあると考えられる記述については、2 人で協議をして最も当てはまると考えら

れるカテゴリに振り分けることにした。

テキストマイニングの分析では、KH Coder¹²⁾を使用し、自由記述の分かち書きと品詞ごとの整理と分析を行った。その際、たとえば「支援」と「サポート」、「辛い」と「つらい」など、表記は異なるが、意味が同じと考えられる記述は、いずれかの表記に統一した。さらに、「不登校」などの単語は、分析過程で「不」と「登校」のように分割されてしまう場合が認められたため、そうした単語には分割を防ぐための固有の名詞コードを付与した。次に、分かち書き処理をした形態素について頻度を算出し、抽出語間の関連性について共起ネットワークによる分析を行った。テキストマイニングにおける共起ネットワーク分析とは、自然言語処理で一般的に用いられる語と語のつながりのパターンに着

目したネットワーク分析の方法であり¹³⁾¹⁴⁾、KH Coderでは語の出現確率に基づいて計算されるJaccard係数の大きさによって語と語のつながりの強さを視覚的に表現することができる。本研究では、語と語のつながりが強い部分を自動的に検出してグループ分けを行う「サブグラフ検出」を用いて共起関係を視覚化した。サブグラフ検出では、出現頻度の高い語ほど大きな円で、語と語の共起関係が強いほど太い線で描画され、同じグループに含まれる語同士は実線で結ばれ、互いに異なるグループに含まれる語同士は破線で結ばれている。

結果

KJ法による分類の結果

本調査においては、46名の調査協力者から

表 1. KJ法による分類結果

大カテゴリ	サブカテゴリ	頻度	記述例
原因	心の問題	27	心の病、トラウマがある、何か理由がある、問題を抱えている
	原因の外在化	17	家族や社会の問題、本人が悪いわけではない、なりたくてなっているわけではない、いじめ
	内向的性格	14	暗い、おとなしそう、繊細
	対人関係の苦手さ	10	人とかわることが苦手、友だちが少なそう、外の世界が苦手
	相互コミュニケーションの問題	7	家族とコミュニケーションがない、周囲との関係が希薄、機能不全家族
	状態	不十分な生活コントロール	35
現実との空間的隔たり		26	部屋から出ない、暗い部屋にいる、一人の時間が長い、社会とのかかわりがほぼない、自分の部屋の前にご飯が置いてある
内的葛藤		25	「よくない」と本人も自覚している、考えている、つらい、苦しんでいる、自分のからに閉じこもる、いろんな感情を抱えている、気分が落ち込んでいる
非現実とのかかわり		18	ゲームをしている、アニメにはまる、マニアックな趣味、ネットでは社会とつながっている
受動的回避		10	学校に行けない、出たくても出られない、誰にも助けを求められない
対人関係の積極的回避		8	誰かと話すのが億劫、人間関係が面倒くさい、人に会いたくない、外に出たくない、周りとの直接の関係を断つ
活動の低下		4	無気力、たくさん寝ている
現実逃避		3	現実逃避している、夢がない
支援やつながりの必要性		21	人とのつながりが必要、本人にも家族にも支援が必要、支えが欲しい
解決の可能性	解決可能	7	必ず解決する、克服できる
	解決困難	6	難しい問題、長期化しそう
ポジティブな意味づけ	必要な時間	9	充電期間、自分と向き合っている、必要な状態
	自己防衛	7	自己防衛、がんばっている、成長段階にある
	ひきこもる意味	4	意味のある行動、自己表現の一つ
	秘められた性質	4	独自の世界観がありそう、何か才能をもっている、実は面白い人だ
理解しづらさ	17	よく実態がわからない、都会でよくありそう、ドラマでよく見る	
ひきこもることによって生じる問題	孤立感	11	孤独、さみしい、楽しくない毎日を送っている
症状の悪化	5	悩みやストレスがたまり続ける、コミュニケーション能力が下がる、外の世界に戻るのが怖くなる	
身近な問題としての認識	13	誰でもなりうる、悪いことではない、たまになりそうになる、急になる	
羨望	4	楽、うらやましい	
周囲のつらさ	2	本人もつらいが周囲もつらい	
その他	2		
合計		316	

計 316 個（平均 6.9 個、最大値 10、最小値 1）の自由記述を得ることができた。これらの自由記述の内容を KJ 法に準拠してカテゴリ分類したところ、11 の大カテゴリに分類された（表 1）。11 個の大カテゴリにはそれぞれ「原因」、「状態」、「支援やつながりの必要性」、「解決の可能性」、「ポジティブな意味づけ」、「理解しづらさ」、「ひきこもることによって生じる問題」、「身近な問題としての認識」、「羨望」、「周囲のつらさ」、「その他」といった分類名が付された。なお、表中の記述例には一般的な回答を記載している。

いくつかの大カテゴリはさらに複数のサブカテゴリに分けられた。比較的出現頻度の高い主要なカテゴリを見ると、たとえば「原因」の大カテゴリは、「心の問題（心の病 など）」、「原因の外在化（家族・社会の問題 など）」、「内向的性格（暗い など）」、「対人関係の苦しさ（人とかかわることが苦手 など）」、「相互コミュニケーションの問題（家族とコミュニケーションがない など）」といった 5 つのサブカテゴリに分かれた。また、「状態」の大カテゴリは、「不十分な生活コントロール（部屋がきたない など）」、「現実との空間的隔たり（部屋から出ない など）」、「内的葛藤（「よくない」と本人も自覚している など）」、「非現実との関わり（ゲームをしている など）」、「受動的回避（学校に行けない など）」、「対人関係の積極的回避（誰かと話すのが億劫 など）」、「活動の低下（無気力 など）」、「現実逃避（現実逃避をしている など）」といった 7 つのサブカテゴリに分かれた。

テキストマイニングの結果

まず、分かち書き処理をした 1,631 個の形態素について頻度を算出し、出現回数上位 50 語のリストを作成した（表 2）。ただし、KH Coder の出力結果には含まれなかったものの、出現頻度が 3 回の語は表 2 に記載された 2 語（「解決」と「楽しい」）以外にも多数存在したため、本研究では出現頻度が 4 以上の 48 語を用いて共起ネットワーク分析を行うこととした。

共起ネットワーク分析の結果（図 1）、48 語のうち 42 語が共起関係でグループ化され、実線で結ばれた語のグループは 5 つあった。1 つ目のグループは、「世界」、「怖い」、「外」、「出る」、「部屋」、「暗い」、「ご飯」、「自分」、「時間」、「心」という 10 語のネットワークで構成されており、「出る」と「ない」との間にも共起関係があることが示されたため、外に出ずに部屋の中にある状態についてその背景や部屋での過ごし方についてのイメージを表している語のまとまりであると解釈された。2 つ目のグループは、「ない」、「人」、「かかわる」、「求める」、「支援」、「必要」という 6 語のネットワークで構成されており、人とかかわりを重視したひきこもり支援についてのイメージを表している語のまとまりであると解釈された。3 つ目のグループは、「悪い」、「本人」、「つらい」、「周囲」、「関係」、「ない」、「家族」、「コミュニケーション」という 8 語のネットワークで構成されており、「悪い」と「ない」との間や、「家族」と「支援」との間などにもそれぞれ共起関係が示されているため、ひきこ

表 2. テキストマイニングにおける抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
ない（否定助動詞）	65	暗い	12	コミュニケーション	7	ゲーム	5	関係	4
する	40	家族	10	多い	7	家	5	気持ち	4
人	29	問題	9	必要	7	求める	5	苦しい	4
ある	24	インターネット	8	かかわる	7	原因	5	心の病	4
つらい	16	悪い	8	外	6	不登校	5	世界	4
社会	16	起こる	8	時間	6	さみしい	4	怖い	4
出る	15	心	8	周囲	6	ご飯	4	様々	4
自分	14	悩み	8	できる	5	パソコン	4	話す	4
部屋	14	抱える	8	ない（形容詞）	5	何かしら	4	解決	3
支援	13	本人	8	たくさん	5	可能性	4	楽しい	3

原因や症状、あるいは特徴に関する記述は重要なイメージとして共有されていることが示されているが⁹⁾、ひきこもりのしろうと理論における原因や状態についてのイメージは、特に「ひきこもり」という単語から連想される「他者との接触頻度の少なさ」といった側面に強調点が置かれていることが本研究結果から示唆された。中でもテキストマイニングの結果からは、外出せずに部屋に閉じこもっているというイメージが抽出されたが、先行研究ではひきこもり状態にある人の6割以上が自由に外出していることが示されており⁶⁾、これらのイメージはひきこもりに対する偏ったステレオタイプであることが推察された。また、KJ法の結果からは、ひきこもり状態の特徴として「不十分な生活コントロール」に関連した記述が多く抽出されたが、これらの記述もひきこもりに対する差別を助長しかねない偏ったステレオタイプであるといえよう。実際、類似のイメージは「ニート」に対しても向けられていることが示されており¹⁵⁾、本来の意味から離れた「駄目なもの」を象徴する言葉として「ひきこもり」や「ニート」という言葉が使用されている可能性も指摘されている¹⁶⁾。これまでもひきこもりの中核的な問題点として対人接触場面を回避することが指摘されているが³⁾、一般の人が抱く上記のようなステレオタイプのイメージに当事者が触れることによって、そうした対人場面の回避がより一層強化される可能性もあるため、ひきこもりの状態像についての正しい情報を一般の人に啓発することは必要不可欠であると言えるだろう。

一方で、本研究では、ひきこもりに対する「支援の必要性」や「ポジティブな意味づけ」、あるいはひきこもりを「誰にでも起こりうる身近な問題」としてとらえるといった記述が多くみられるなど、ひきこもりに対する共感的・肯定的なイメージも認められた。同様のイメージは、うつやニートに対するしろうと理論においても部分的に認められているが⁹⁾¹⁵⁾、本研究の結果からは、こうしたイメージがひきこもりのしろうと理論においてはむしろ中核的な要素となっている可能性が示唆された。ただし、実際の記述内容を見ると、中には「(ひきこもりに)た

まになりそうになる」といった記述も認められることから、調査協力者である大学生にとって他者との接触を断つことが一つの身近なストレス対処行動として認識されている可能性が推察され、先に示した「不十分な生活コントロール」といったイメージも、「ひきこもりそうになる」自分への戒めが言語化された結果であると言えるかもしれない。

本研究の結果から得られたもう一つの重要な知見としては、ひきこもりのしろうと理論では、家族と非現実的世界（インターネットやゲーム）に言及する記述が数多く認められたことである。まず、家族に関連したイメージとしては、ひきこもりの原因を家族関係に帰属するといった記述がある一方で、家族の大変さに配慮する記述や家族への支援の必要性について言及する記述も数多く認められ、一般の人にとってひきこもりという言葉は良くも悪くも「家」や「家族」というイメージと結びつきやすいことが示唆された。もっとも、ひきこもりという単語自体が空間的な場所性を内包しているために「ひきこもる場所＝家」という連想を引き起こしやすいのかもしれないが、実際の援助現場では、兄弟姉妹にひきこもっている者がいることで自身の結婚に影響があるのではないかと危惧する者が一定数存在するなどといった報告もあり³⁾、このような一般的なイメージがあることでひきこもっている者を抱えた家族が他者からの視線に対して不安を抱きやすくなってしまうことも危惧される。その意味では、地域の支援者や一般の人に対して、ひきこもり状態の人を抱えた家族の状況についても、正確な情報を提供することが必要と言えるだろう。

他方、インターネットやゲームに関連した記述においては、サイバー空間などの非現実的世界に没入していることをネガティブにとらえる記述がある一方で、インターネット上の関係性を当事者が悩みを相談する重要なリソースであると肯定的にとらえるような記述も見られた。いずれも、現実の人間関係と対置した記述内容であると考えられるが、インターネットやゲームの利用を全否定するのではなく、一定の配慮が見られる点において、新しいメディアやテクノロジーに対する親和性の高い若年者特有の反

応である可能性が考えられた。

最後に、本研究の主たる方法論上の限界について触れておきたい。まず、本調査は一時点での小さなサンプルによる横断的調査であり、回収率も低く、女性の調査協力者の割合が高いため、本研究で用いたデータには偏りがあり、したがって、得られた結果を一般化できるわけではない。また、調査対象者の多くは、筆者が実施する心理的支援に関する授業を事前に受講しているが、その授業内容が本調査にどのように影響したのかについても考慮に入れていない。今後の研究においては、大学生以外の対象者にも幅広く調査協力を依頼し、サンプルサイズを大きくした上で、対応分析やクラスタ分析など他の統計解析を併用しながら、多角的にひきこもりのしろうと理論を検討する必要がある。

結語

本研究では、KJ法およびテキストマイニングの手法を用いて、ひきこもりのしろうと理論の構造を多角的に検討した。本研究の結果は、ひきこもり支援に関連した一般地域住民への普及啓発のあり方について、重要な示唆を提供し得るものであると考えられた。

謝辞

本研究は、新潟県立大学人間生活学部子ども学科 2013 年度卒業論文「大学生が抱く『ひきこもり』イメージに関する研究（高橋夕佳梨）」のデータをもとに再分析を行い、加筆修正を行ったものである。調査にご協力くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. http://www.ncgmkohndai.go.jp/pdf/jidouseishin/22ncgm_hikikomori.pdf (参照 2015 年 1 月 13 日)
- 2) Koyama A, Miyake Y, Kawakami N et al. World Mental Health Japan Survey Group, 2002-2006. : Lifetime prevalence, psychiatric comorbidity and demographic correlates of "hikikomori" in a community population in Japan. *Psychiatry Research*. 2010; 176: 69-74.

- 3) 境泉洋, 斎藤まさ子, 本間恵美子 他. 「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑩ 2013.
- 4) Kondo N, Sakai M, Kuroda Y et al. General condition of hikikomori (prolonged social withdrawal) in Japan: psychiatric diagnosis and outcome in mental health welfare centres. *International Journal of Social Psychiatry*. 2013; 59: 79-86.
- 5) 岩崎久志. 自治体のひきこもりへの支援の現在. *流通科学大学論集-人間・社会・自然編*. 2012; 25: 1-18.
- 6) 境泉洋, 堀川寛, 野中俊介 他. 「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑧ 2011.
- 7) 境泉洋, 川原一紗, NPO 法人全国引きこもり KHJ 親の会. 「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑤ 2008.
- 8) Furnham AF. *Lay theories: Everyday understanding of problems in the social sciences*. New York: Pergamon Press, 1988.
- 9) 勝谷紀子, 岡隆, 坂本真士 他. 日本の大学生におけるうつものしろうと理論: テキストマイニングによる形態素分析と KJ 法による内容分析. *社会言語科学*. 2011; 13: 107-115.
- 10) 川喜田二郎. *発想法*. 東京: 中央公論新社, 1967.
- 11) 藤井美和, 小杉考司, 李政元. *福祉・心理・看護のテキストマイニング入門*. 東京: 中央法規出版, 2005.
- 12) 樋口耕一. *社会調査のための計量テキスト分析 —内容分析の継承と発展を目指して—*. 京都: ナカニシヤ出版, 2014.
- 13) 森田哲夫, 入澤覚, 長塩彩夏 他. 自由記述データを用いたテキストマイニングによる都市のイメージ分析. *土木計画学研究・論文集*. 2012; 29: 315-323.
- 14) 安田雪. *ネットワーク分析—何が行為を決定するか—*. 東京: 新曜社, 1997.
- 15) 伊藤嘉奈子. フリーターとニートのイメージに関する一考察. *鎌倉女子大学紀要*. 2008; 15: 43-50.
- 16) 本田由紀, 内藤朝雄, 後藤和智. 「ニート」って言うな. 東京: 光文社新書, 2006.

ABSTRACT

The lay theories of hikikomori in undergraduate students

Yotaro Katsumata^{1*}, Yukari Takahashi²

¹ Department of Child Studies, Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture

² 2014 graduate of University of Niigata Prefecture

* Correspondence, yotaro-k@unii.ac.jp

The present study examined the lay theories of hikikomori (acute social withdrawal). The participants were 46 undergraduate students (5 males and 41 females) who consented to participate in the study; a total of 80 students were asked to participate (57.5% participation). The self-reporting questionnaire was designed to obtain the text data of hikikomori using SCT method. The text data was analyzed using the KJ method and a text mining method. The results showed that participants mainly mentioned the causes of hikikomori, conditions of hikikomori, and supports for individual and family suffering from hikikomori. In addition, participants also mentioned the image that the people who had experienced hikikomori tended to get into the Internet or online-games. Despite some limitations, the findings of this study contribute to the useful information available on countermeasures against hikikomori in Japanese people.

Key Words: hikikomori, lay theory, text mining analysis, KJ method analysis